2023年度　**マネジメント学部**
一般選抜Ａ日程問題

国　　語

2023年２月実施

出 題 科 目	ページ	解答番号
国　語（100点）	4 ～19	1 ～ 27

注 意 事 項

1　選抜開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見ないこと。

2　問題は４～19ページである。

3　選抜中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。

4　**解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので，監督者の指示に従って，それぞれ正しく記入し，マークしなさい。**

①　**選抜番号欄**

必ず**選抜考番号**（数字）を**記入**し，さらにその下のマーク欄に**マーク**しなさい。

②　**氏名欄**

氏名及び**フリガナ**を**記入**しなさい。

5　必要事項欄及びマーク欄に**正しく記入・マークされていない場合は，採点できないことがあるので注意すること。**

6　解答は，解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば，31 と表示のある問いに対して⑤と解答する場合は，次の(例)のように**解答番号31**の**解答欄**の ⑤ に**マーク**しなさい。

(例)

解答番号	解　答　欄
31	① ② ③ ④ ● ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

7　問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離さないこと。

国語

（解答番号 1 ～ 27）

I 次の文章は、一九二〇年代にフランスで興隆したシュルレアリスム（英語ではシュールリアリズム）運動をめぐって書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

戦争が終わってみると、同世代の若者たちが数知れず戦死していた。戦場から辛くも生還した者も、その多くが、取り返しのつかない損害を肉体に、精神に、負っていた。にもかかわらず、社会の現実は、戦争を引き起こしたときと大差のない状態で在り続けている。これからは平和外交が大切だ、国際協調が第一だと唱えはしていても、根本の精神に変化は見られなかった。

この戦後社会の無反省ぶりを許すことのできない若者たちがいた。自分は助かったからいいと内心で［ a ］な満足に浸ることなどとうていできず、逆に深い怒りを戦後の現実に覚える若者たちがいた。

この場合の戦争とは、第一次世界大戦（一九一四―一八）を指す。シュルレアリスムは、一九二〇年代、フランスで生まれた文化運動である。それまでの西欧の近代文明を根底から批判し、新たな人間の可能性を呈示し表現した文化運動である。若い詩人、文筆家、画家が中心だった。

第一次世界大戦の前から存在し、戦後も改まらずに存続していた社会の現実。これを、シュルレアリストたちは、「デカルト的世界」と呼んで、糾弾していた。

「デカルト的世界」とは何なのか。シュルレアリストたちが［ b ］世界ときめつけた理由は何なのか。この世界は、一言でいえば、偏った理性主義者からなる社会のことである。自分を理性的な存在だとみなし、非理性的なものの前で自分の優越を信じ、これを思うように支配していってかまわないと考えている人々からなる社会のことである。その成立の過程を簡単に記しておこう。

ルネ・デカルトは一七世紀に活躍したフランスの哲学者である。『方法序説』にある「私は考える。ゆえに私は存在する」という言葉を思想の出発点にした。この出発点の意味するところはまことに大きく、これにより理性的に「考える私」と肉体的に「存在する私」の二元論が打ち立てられた。前者の理性的な「私」が主人となり、その力のもとに後者の肉体の「私」を支配していく構図ができあがったのだ。理性的な「私」によって支配されるのは肉体だけではない。自然界の事物にまで及んだ。今日の科学にあたる自然学についてデカルトはこう㋐ゴウゴする。「「自然学の一般的な知識のおかげで」我々は自然の主人かつ所有者になることができるのである。このことは、労せずして地上の果実、すべての便利な物々を享受することを可能ならしめる無数の技術の発明という点で望ましいだけでなく、また主として、間違いなくこの世の生の第一の善であり根本であるところの健康の維持にとっても望ましいのである」（『方法序説』）。

『方法序説』が出版された当時、西欧は科学革命のさなかにあり、デカルトも科学者としてその推進に大いに寄与していた。中世以来の迷信や占い、呪（まじな）いによる不合理な自然との交流は退けられ、実験と観測に基づく合理的な自然理解、自然法則の発見が主流になりつつあったのである。

この科学革命の進捗（しんちょく）は一八世紀に産業革命を引き起こした。デカルトが予測したように「無数の技術の発明」が生じ、新たな製品が大量に産出されるようになったのである。他方で、一八世紀の西欧では政治革命も進捗した。王侯貴族や聖職者といった少数の人間が不合理に特権を享受していた体制が批判され、多くの人間の合議と合意に基づく民主的な政治体制が生み出されていった。一七八九年に始まるフランス革命はその典型例である。このとき発表された「人権宣言」は、［ c ］な個人と国家が社会の主人公になったことを告げている。西欧の近代社会は、これら科学革命、産業革命、政治革命の三大革命によって成立していった。

だが、西欧諸国が近代化を進めていくのに応じて、偏った理性主義もまた進捗した。「我々は自然の主人かつ所有者になることができる」というデカルトの言葉が、大々的に非西欧世界に差し向けられて、どんどん実現されていったのだ。ヨーロッパ外の世界を自然状態の世界、未開の世界とみなし、これを軍事力によって獲得し支配していく、植民地獲得の動きのことである。一九世紀を通して、アジア・アフリカの地域、いや地球上のほぼ全域が、西欧の強国の支配に入ってしまった。

一九一四年に勃発した第一次世界大戦の原因がここにある。もはや獲得できる領土が地球上になくなってしまったため、他国の領土への略奪心や再分配への欲求が軍事力を背景に陰に陽に現れはじめていたのだ。第一次世界大戦が大量の犠牲者を出して終わっても、フランスはその原因を深く追求せず、一九一九年のヴェルサイユ条約では戦勝国即主人という立場から戦争の責任を一方的に敗戦国ドイツに押し付け、巨額のバイ㋑ショウ金を課したのである。これによりドイツでは反仏報復感情が高まり、ナチスの軍事政権を生む温床が育っていった。

シュルレアリスムは、こうした西欧の近代社会を、根源に立ち返って批判した。単に理性主義を退けようとしたのではない。理性と非理性の併存こそを望んでいたのである。ブルトン（注1）は、オーストリアの精神分析学者フロイトこそが「私たちの指導的思想家」だったと回想している。「彼の教えのすべては、お互い無視を決めこんでいる、いわゆる理性の力と奥深い情念、この両者の断絶もしくは分裂が人間に致命的な危険をもたらすということを私たちに示してくれたことにあったのです」。相対立する現実、相矛盾する人間の可能性が接近し隣接して、新たな生を発出させること、この事態を肯定し、表現していく点にシュルレアリスム運動の本質があった。近代を㋒サッシンするシュルレアリスム革命の本質がそこにあった。

この運動を間近で見ていた日本人がいる。画家の岡本太郎（注2）だ。一九三〇年一月、彼は一八歳の若さでパリに入り、フランス語を学びながら、絵の修業に励んだ。シュルレアリストたちとも親交を持ち、そのなかで彼の「対極主義」も生まれていった。矛盾する二つの要素をいくつも画面で華々しく衝突させる様式である。

第二次世界大戦が始まると帰国し、兵役に服し、戦後は再び絵筆を取って旺盛（おうせい）に画業を展開した。一九五二年一一月にはその成果を携えて渡欧し、翌年一月からはパリで個展を開いている。そのとき、ブルトンらシュルレアリストと旧交を温めたが、もはやこの運動の衰退はいかんともしがたく、こんな言葉を書き記している。

パリ画壇は確かに戦前と変わった。一つの例は、スュール(注3)レアリスムの退潮である。戦前パリ画壇にクン㋓リンし、ジャーナリズムを通じて世界を圧倒していたスュールレアリスムが、フランスの戦後世代にはム㋔エンになっている。超現実的要素を持っている作家も今日スュールのレッテルをはられるのを喜ばない。過去の偏狭なグループの型の中で見られるのを恐れるからであろう。（「ヨーロッパの戦後派」）

これはしかし第二次世界大戦後にシュルレアリスムが勢いを失い、ついには消滅していったということではまったくない。シュルレアリスムの精神は別なかたちで存続していたのだ。それはどういうことか。毎日がシュルレアリスムの観を呈しているということなのか。異様で、突飛で、残虐な出来事が日々頻発している今日のこの日常を指してのことなのか。そうではない。そのような事件に、さらにはその温床となっている我々の精神のなかに、我々は近代の病を批判的に読み取れるようになっているということなのである。

片や我々は、デカルトの言う「自然の主人かつ所有者」になり、「労せずして地上の果実、すべての便利な物々を享受すること」ができるようになっている。知識や情報、最新のメディア機器もこの「便利な物々」に含めてよいだろう。我々は、しかしこれらの物の簡便さと豊富さに慣れてしまい、少しでもそれが満たされない状態に陥ると、苛立ち、他人との格差を意識し、怨恨感情や失望感を心の底に宿してしまう。そこから自己中心的な言葉や行為を他人に差し向け、他人を手ひどく傷つけることまでやってしまう。謝ればいいだろうという気楽さで、だ。しかしその反面、これが近代の病であることを知っている。物に毒された悲劇であることを心のどこかで察知している。そして「自然の主人かつ所有者」になることだけが人間性ではないという思いにどこかで駆られている。我々はかろうじて近代への批判意識を持ち、今日を乗り切っているかのようだ。

この批判意識の原点にシュルレアリスムがある。もちろん、この運動の創始者たちとて近代の病に冒され、矛盾やさまよいを何度も呈しはした。だが、近代文明に風穴をあけた彼らの試みは d であり、D そこから吹く風に現代の我々も生を得ているのだ。

（酒井健『シュルレアリスム』）

（注）1　アンドレ・ブルトン……フランスの作家（一八九六～一九六六）。シュルレアリスム運動における主導的役割を果たした。
2　岡本太郎……画家（一九一一～一九九六）。
3　スュールレアリスム……シュルレアリスムのこと。

問一　傍線部㋐～㋔の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は㋐ — 1 、㋑ — 2 、㋒ — 3 、㋓ — 4 、㋔ — 5 。

㋐ ゴウゴ 1

① ゴウを煮やす。
② 質実ゴウケン。
③ ゴウレイをかける。
④ 村一番の大フゴウ。
⑤ ゴウマンな態度。

㋑ バイショウ 2

① 代金をベンショウする。
② ヒョウショウ状を授与される。
③ シショウと弟子の関係。
④ 食材のショウミ期限。
⑤ アンショウ番号を打ち込む。

㋒ サッシン 3

① 話題の本がゾウサツされた。
② 伝統文化についてのコウサツ。
③ 駅のカイサツで待ち合わせる。
④ 写真サツエイ。
⑤ 二国間の貿易マサツ。

㋓ クンリン 4

① リンジン愛の精神。
② ジンリンにもとる行為。
③ 高層ビルがリンリツする。
④ 物のリンカクを描き出す。
⑤ リンジ列車。

㋔ ムエン 5

① 雨天ジュンエン。
② エンギをかつぐ。
③ 舞台をエンシュツする。
④ エンポウからの客。
⑤ 財政面でのエンジョ。

問二　二重傍線部X～Zの表現に最も意味の近い言葉を、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は X ― 6 、Y ― 7 、Z ― 8 。

X　辛くも生還した　6

① 命あっての物種（ものだね）
② 九死に一生を得る
③ 運は天にあり
④ 生き馬の目を抜く
⑤ 怪我（けが）の功名

Y　取り返しのつかない　7

① 弘法にも筆の誤り
② 一炊（すい）の夢
③ 覆水盆（ぼん）に返らず
④ 過ぎたるは猶（なお）及ばざるがごとし
⑤ あぶはち取らず

Z　大差のない　8

① 呉越同舟
② 大同小異
③ 異口同音
④ 同床異夢
⑤ 付和雷同

問三　空欄 a ～ d に入れるのに最も適当な言葉を、次の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は a ― 9 、b ― 10 、c ― 11 、d ― 12 。

① 欺瞞（ぎまん）的　② 理性的　③ 超越的　④ 画期的　⑤ 自己中心的　⑥ 原点回帰的

問四　傍線部**A**「その人たちから、シュルレアリスム運動は起きたのである」とあるが、ここで筆者が言おうとしているのはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 13 。

① 戦争が終わっても変わろうとしない社会の現実を前にして、深い怒りを覚えた若者たちのなかから、戦争のもたらした不条理や悲惨さを、詩や文章や絵画などによって告発していこうとする動きが生まれたということ。

② 同世代の多くの人々を死に至らしめた戦争を経験し、その後の社会の戦争に対する無反省ぶりに憤りを感じていた若者たちのなかから、戦争を引き起こした世代を糾弾し、社会制度を変革しようとする動きが生まれたということ。

③ 戦争を引き起こしておきながら戦後も無反省でありつづけていた理性主義者たちと、彼らからなる社会に対して怒りを覚えた若者たちのなかから、一切の理性的なものを拒もうとする態度を追求していこうとする動きが生まれたということ。

④ 理性を偏重する近代社会に戦争の原因を見出し、そうした社会の存続を許しがたいと感じた若者たちのなかから、理性と非理性という矛盾するものの併存や相克に注目することで人間の新たな可能性を表現しようとする動きが生まれたということ。

⑤ 自分が優れていると信じこんでいる偏った理性主義者たちの世界が戦争の原因となっていたことに気づき、そうした世界を糾弾しようとした若者たちのなかから、肉体的なものを用いた表現によって理性を否定しようとする動きが生まれたということ。

問五 傍線部B「第一次世界大戦」とあるが、「第一次世界大戦」が起きた原因について、本文ではどのように述べられているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 14 。

① 近代化とともに偏った理性主義が力を振るうようになり、西欧諸国が未開世界を理性の力で支配すべきだという考え方が拡がっていくなかで、支配領域の拡大へと向かう欲望を肥大化させた西欧の強国同士が、力ずくで他国の領土などを奪い合うようになったから。

② 西欧近代の世界は、非理性的な未開の世界を自分が支配してもかまわないと考える偏った理性主義者によって作られており、彼らによって作られた西欧諸国が、未開の世界を奪い取ろうとしてその世界に激しい攻撃を仕掛けるようになったから。

③ 偏った理性主義が進捗していくなかで、理性的世界が非理性的世界の主人になるべきだという考え方が一般化し、植民地支配を自明とする西欧諸国と、そうした支配に徹底的に抵抗しようとする植民地との間で、激しい戦いが繰り広げられるようになったから。

④ 西欧諸国が近代化を進めていくのに応じて、偏った理性中心主義も極端に進捗し、やがてその反動で理性そのものが顧みられなくなるような状況が生じてしまい、理性を失った人々同士が無軌道な争いを繰り返すようになったから。

⑤ 西欧の外にある世界は、かつては自然状態の未開世界と見なされていたが、文明の進展によってそうした世界から自然が失われると、自然的世界を求めて西欧諸国が領土を所有しようとするようになり、その領土獲得戦争が際限なく拡大していったから。

問六 傍線部C「これを、シュルレアリストたちは、『デカルト的世界』と呼んで、糾弾していた」とあるが、ここでいう「デカルト的世界」は、どのような経緯で成立したのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 15 。

① 理性的な「私」と肉体的な「私」とを二元論的に捉えるというデカルトの思想は、シュルレアリストらによって一時は激しく糾弾されたが、その糾弾に打ち勝とうとすることでますます力を強め、やがては西欧近代の世界を完全に支配するようになった。

② 理性的な「私」と肉体的な「私」とを二元論的に捉え、前者による後者の不合理な支配を正当化しようとするデカルトの思想は、非理性的なものを文化や芸術の世界からも閉め出し、人間の感覚や情念などを軽視するような態度を世に広めることになってしまった。

③ 理性的な「私」と肉体的な「私」とを二元論的に捉え、前者が後者はおろか自然界の事物に対しても所有者として振る舞えるとするデカルトの思想は、極端な理性中心主義を生み、そうした考え方を絶対化して疑おうともしない人々からなる世の中ができあがった。

④ 理性的な「私」と肉体的な「私」とを二元論的に捉え、前者を絶対化するというデカルトの思想は、偏った理性主義を世に広めることになり、戦争という非理性的な行為をも理性的にしか捉えられないような人々を、数多く世に送り出してしまった。

⑤ 理性的な「私」と肉体的な「私」とを二元論的に捉え、前者が後者だけでなく自然界の事物をも支配すると考えるデカルトの思想は、科学革命や産業革命を促進させ、人権を失った個人が機械文明に支配されるという近代の病理を世界に拡散させていった。

問七 傍線部D「そこから吹く風に現代の我々も生を得ているのだ」とあるが、このように言う筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 16 。

① 文化・芸術運動としてのシュルレアリスムは退潮してしまったが、シュルレアリストらの精神は現代にも息づいている。したがって、近代への批判意識が欠如している我々現代人も、シュルレアリストらの行為を追体験すれば近代への批判意識を獲得することができ、そこではじめて近代の病に冒された自分から脱却していく道が開かれる。

② もともとシュルレアリスムという運動は第二次世界大戦以前に生じたものであり、その運動の創始者のなかには近代の病に冒されていた者もいた。しかし、彼らの精神は知識や情報、メディア機器などの便利な品々にかたちを変えて残されており、我々はそれらを享受することで、充実した生活を送ることが可能になっている。

③ 現代に生きる我々は、たとえば岡本太郎のようにシュルレアリスム運動を間近で見ることはできないが、シュルレアリストたちの残した作品を知ることは可能である。そして、そうした作品に親しんでいけばいくほど、シュルレアリスムという芸術運動の精神をそのまま受け継いで、近代への批判意識を養っていくことができる。

④ シュルレアリスムの運動が現代では衰退してしまったことも事実だが、いま我々がシュルレアリスムの観を呈するような異様な日々のなかで生活している以上、シュルレアリスムの精神はいまも息づいているということができる。そして、その精神は我々に近代への批判意識をもたらし、我々の生に活力を与えてくれている。

⑤ 我々を取り巻く思わしくない出来事は近代の病によるものであり、そうした出来事を生み出している我々の精神も近代の病に冒されたものだということができる。けれどもその一方で我々は、シュルレアリスムに通じる近代への批判意識も我がものとしており、そのことによって日々の生活を健全に送ることもできている。

Ⅱ

次の文章は、ある小説家が二〇〇一年に発表したものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

山村世界は、平地とは類型の異なる実に豊かな生活文化をもっている。ところが、歴史学の世界では、発展から取り残された後進的な地域としてのみ認識され、その内実が正当に評価されてきたとは言いがたい。A この原因はいったいどこにあるのだろうか。

歴史学を特徴づけるのは、文献史料を中心的な素材にするという点である。文献史料は文字史料と言いかえてもいい。そして山村が後進地域と見なされてきた大きな原因は、この文献史料そのものにある。[①]

B 過去の事象をふり返ることで人間というもののありようを探ろうとする学問分野としては、狭義の歴史学以外に、考古学や民俗学がある。考古学は、土中の遺物等の「物質資料」から過去の人間の生活や文化、経済や社会、政治など、さまざまな事象を明らかにしようとする。民俗学は、必ずしも過去を対象とするばかりではないが、多くはこれまでに営まれてきた人間の生活や社会のあり方を主要な関心事とし、古老からの聞き取りや事物・行事・景観等の観察によって、人間社会の姿を描き出そうとする。しかし、過去を探るという点でいうと、考古学的遺物の発見はある種の偶然や偏りをもっており、さらに時代の確定も、大半は誤差を含んだある幅をもったものにならざるをえない。民俗学についても、観察と聞き取りから明らかにできるのは、比較的直近の過去、すなわち現代人の祖父や曾祖父の世代のことまでである。

これに比して歴史学は、「歴史」を㋐標榜（ひょうぼう）する学問であるだけに、文字の書き残される時代に関しては、詳細かつ膨大な情報を有している。ことに時代の動きの根幹を成す政治や制度については、歴史学の独擅場（どくせんじょう）であるといってもよい。時によっては、ここから、時代の「枠組」はそれらの「主要な」史料からほとんど明らかにでき、史料に現れてこない事象は「たいしたことではない些末（さまつ）なもの」という a 剰な自信をも生み出してしまうことがある。こうしてみると、山の世界はまさに、あり余る厚みをもちながら、文献史料の世界の間隙（かんげき）に落とし込まれ、見過ごされてきた一つの象徴的な分野といってよいのである。[②]

問題の一つは、歴史学で扱う文献史料そのものの性格にある。山村世界がこれまで歴史学で注目されてこなかったのには、文献史料のもつ三つの性格が作用していると思われる。C 三つとは、「少ない」「気がつかない」「目眩（くら）ましされやすい」という点である。[③]

まず「少ない」から見ていこう。たしかに文献史料は、各時代の政治の動き、法や制度の姿、経済の状況、社会構造、文化的営為に至るまで、網羅的に叙述するだけの素材をもっている。しかしこの網羅性には、かなりの偏りがある。文献史料が一つの時代の広範な分野を網羅していると考えるのは、ある意味で研究者の思い込みであるかもしれない。足りない部分が明らかになって初めて、今までの史料がどの部分を厚くカバーし、どの部分に希薄であったかが認識されるのであって、描かれていない部分が認識されない限り、網羅性の虚構は相対的に認識されえないし、崩すこともできない。実は文献史料で時代の全相が網羅されていると漠然と思い込んでいること自体が、錯覚といえるのである。もちろん個々の歴史研究者に文献史料が万能かと聞

けば、決してそうではないという答えが返ってくるだろう。論理的には理解しているのである。しかし、面と向かって質問されて答えるのと、日常の研究営為の中でそのことを常に認識し続けるのとは、必ずしも同じではない。

具体的にいうと、為政者の政治的動向や権力者の発した法などは多くの史料が残されるし、稲作的世界に関わる史料もたいへんに多い。だがそれに比して、山村や海村の生活文化を伝える史料は数量的にはずっと少ない。少ないということは、史料の欠如している世界について認識される機会が限られるということを意味する。

ただ、文献史学では史料の限られた分野について研究することが不可能なのかというと、決してそうではない。史料が b 無であれば、歴史学としてのアプローチは困難であるが、たとえば山村に関わる史料は、数こそ少ないものの、興味深い断片的な史料はまだまだ残されている。問題はそうした史料に「気がつく」かどうかである。断片的な用語や表現が、実は山村世界の重要な問題を垣間見せるものであることに気がつく必要がある。そしてそのためには、聞き取りなどの民俗学的情報を豊かにもち、文献史料を読む際の感度を上げておかなくてはならない。[④]

さらに文献史料を読むにあたってより重要なことは、「目眩ましされやすい」という自覚をもつことである。例えば、江戸時代の社会は石高制を基本としていたとされる。形式的な米の収穫高とされる石高をもって村ごとの課税基準としていたのである。したがって、全国の各村々にはそれぞれ石高（村高）という数字が与えられている。当然ながらこの石高が高く、一軒あたりの持高が多いほど生産力が高く富裕な村ということになり、逆に村高が低く、家の持高が少なければ貧しいと見なされる。もちろん研究者にとっては、石高という数字の虚構性は常識に属することである。しかしそうはわかっていても、意識としてはその数字の ㋑多寡に引きずられやすい面がある。

稲作のあまり行われない山村や海村の場合は、山海の生産物も米に換算して石高に組み込んだり、あるいは石高を基準にかかる年貢とは別に小物成（雑税）の形で課税したり、地域により領主によりいろいろな手法が取られる。しかし、概して山村・海村の石高は、平地の稲作地帯の村々より低いことが多い。仮に立地環境を視野に入れずに村高の数字だけを比較すると、石高の低い村は高い村に比べて貧しいものと理解してしまうのが普通である。立地環境を考慮しても、村高の低いところが山間地であれば、ああ、やはりここは米のあまり穫れない貧困な村なのだ、と納得してしまう。[⑤]

だが、そもそもこうした考え方は、日本中が稲作によって暮らしを立てていることを前提にした解釈でしかない。全国の村々が水田稲作を営む生活類型の似通った状態であるならば、この比較は意味をもつであろう。しかし日本は、地域により立地により、まったくその生業・生活類型を異にする村々の集合体である。とするならば、石高の数字による比較は必ずしも生活実態を反映したものとはいえない。こんな低い石高でいったいどうやって暮らしていたのか、と思われる山村でも、実際には豊富な山の資源に支えられて、数字に表れない多様な稼ぎや自給物資で生活の成り立っている場合もある。

石高に限らずとも、一般に文献史料は、平地を支配する為政者との関わりで作成されることが多い。山村や海村にも、平地の支配システムを準用する形で支配が行われ、平地型（水田稲作型）の文書が作成される。史料の多くが「平地的」形式を取って作成され、まるで日本中が稲作地帯であったかの

ように錯覚を抱かせる現象が生じるのである。考えてみれば、文書とは、個別の事例や地域性を覆い隠して作成されるものだともいえる。[⑥]

日本中が稲作地帯のように表され、平地的なシステムがすべてであったかのような不自然さをこそ、私たちは追及していかなくてはならない。そして、断片的な言葉や言い回しの裏に隠された実像を明らかにしていく必要がある。地域の事情を覆い隠して日本中を均一に見せる文献史料の「平準化作用」に目をくらまされてはいけないのである。少なくとも私たちは、日本の約七割が山に覆われ、また高度経済成長下の急激な過疎化以前には、多くの人々が山村に住んでいたことを事実として知っているのであるから。

（白水智（しろうずさとし）『知られざる日本』）

問一 空欄 a ・ b に入る漢字として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は a — 17 、 b — 18 。

① 余　② 過　③ 虚　④ 皆　⑤ 強　⑥ 完

問二 傍線部㋐・㋑の意味として正しいものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は ㋐ — 19 、 ㋑ — 20 。

㋐ 標榜する 19
① 基本とする
② 公然と掲げ表す
③ 中心とする
④ 大義名分にする
⑤ 最優先させる

㋑ 多寡 20
① 多いか少ないか
② 量の多さ
③ 多様なあり方
④ 多すぎるありさま
⑤ 雑多でわかりにくいさま

問三 次の文X・Yは、もとと本文中にあったものである。元に戻すとしたら、［ ① ］～［ ⑥ ］ のどこに入れるのが最も適当か。それぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は X ― 21 、Y ― 22 。

X こうした目配りなくしては、大事な手がかりも何気なく読み飛ばしてしまうことになる。

Y とすれば、そこに書かれた文言を額面どおりに受け取ることは、人間の営為に対する想像力の放棄としかいえない。

問四 傍線部A「この原因はいったいどこにあるのだろうか」とあるが、「この原因」を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 23 。

① 歴史学者は文献史料を中心に研究を行うが、山村の文化を伝えるわずかな史料に注目することや、その資料のなかに潜んでいる山村の実像を読み取ることは、けっして易しいことではないから。

② 山村世界は発展から取り残された後進的な地域として認識されがちであり、そのため文献史料を用いる歴史学においても、そうした山村についての研究はしばしば後進的なものと見なされてしまうから。

③ 平地に比べて山村世界は文化に乏しいところがあるため、文献史料を用いる歴史学においても、山村に目を向けその内実を正当に評価しようとする良心的な研究者の数は限られてしまうから。

④ 実際には山村世界についての文献史料は豊富に残されているのだが、歴史学の研究者で、そうした史料の存在に注目でき、しかも目眩ましされることなくそうした史料の内容を理解できる者は少ないから。

⑤ 考古学における物質資料や民俗学における観察対象などと比べると、歴史学全般で用いられる文献史料は数が少なく、しかもその存在に気づき、その内容を正しく理解できる研究者も限られているから。

問五　傍線部Bで筆者は、「過去の事象をふり返ることで人間というもののありようを探ろうとする学問分野」として、「歴史学」「考古学」「民俗学」の三つをあげている。これらについての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 24 。

① 物質資料を主な研究対象とする考古学や、主に聞き取りや観察などによって研究を行う民俗学に比べると、文献史料によって研究を行う歴史学は、洗練された学問だといえる。

② 平地における人間の生活文化を研究するには考古学が最も適しているが、山村世界に特有の生活文化を研究するには民俗学の方が適しているということができる。

③ 民俗学には遠い昔の文化について明らかにできないという欠点があるが、考古学と歴史学にも、過去の出来事についての時代の確定が正確に行われにくいという欠点がある。

④ 断片的な文献史料に隠された山村の実像を読み取るための感性を鍛えるためには、日頃から考古学的な知識を豊富にするように努めることが必要となる。

⑤ 為政者との関わりという観点から政治や制度などのあり方をふり返って研究するには、考古学や民俗学よりも歴史学のほうが格段にふさわしいと考えられる。

問六　傍線部C「三つとは、『少ない』『気がつかない』『目眩ましされやすい』という点である」とあるが、これについて、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1)　「少ない」および「気がつかない」についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 25 。

①　政治や経済などに関する文献史料は網羅的であるため、そうした史料になじんでいる歴史学者は、山村に関する文献史料が断片的だということに思いが及ばない。

②　政治や経済に関する文献史料に見られる網羅性とは違って、山村世界に関する文献史料に見られる網羅性は虚構的だが、そうした両者の違いに気づく者は少ない。

③　歴史学においては文献史料の有無にかかわらず研究が行われるべきだが、山村については、史料が少ないということを理由に、研究を怠ることが正当化されがちである。

④　山村についての興味深い断片的史料は多くないが残存しているものの、そのなかのちょっとした記述が重要な問題を示唆していることを、敏感に察知するのは難しい。

⑤　文献史料のなかにある断片的な用語や表現は、山村に暮らす人々の実情を隠蔽するために書かれたものなので、そこから真実を読み取るには高い感性が必要となる。

(2) 「目眩ましされやすい」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 26 。

① 文献史料は平地の生活を記録したものが多く残されており、山村の生活を記録した史料はわずかしか残されていないが、にもかかわらず、それら二種の史料をどちらも同じくらい重要なものだと見なしてしまうこと。

② 文献史料は為政者が自らの支配を正当化するために作成したものであるはずだが、石高が少なく貧しいはずの山村について、平地以上の文化的な生活があったなどと史料にあると、その言葉を鵜呑(うの)みにしてしまうこと。

③ 文献史料は平地を支配する為政者との関わりで作成されることが普通であるため、平地以外の地域の実情を反映していないことが多いのに、その史料に書かれていることを山村や海村の実態を正確に示したものと捉えてしまうこと。

④ 文献史料は一般的に個別の事例や地域の特性を無視して作成されているが、にもかかわらず石高という数字には地域ごとの特徴が現れていると考え、地域固有の生活実態をそれぞれ把握したつもりになってしまうこと。

⑤ 文献史料には水田稲作型の生活を基準とする価値観が浸透しているため、山村における石高の少なさは貧しさを証明するものだと思いこみ、そこで平地よりも豊かな生活が営まれていることを見逃してしまうこと。

問七 筆者の意見に合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 27 。

① 歴史学が山村文化の研究に向いていないのは、それが文献史料を用いる学問だからである。

② 過疎化以前には山村にも平地と同様の文化が豊かに息づいていたことを、忘れてはならない。

③ 日本の生活文化には多様性があるが、従来の歴史学はそのことを十分に明らかにしてはこなかった。

④ 時代の全相を完全に網羅した文献史料とそうでない文献史料とがあることに、もっと注意すべきである。

⑤ 文献史料が万能ではないということをまったく理解していない点が、歴史学者の大きな欠点だと考えられる。

国語（Ｍ）（マークシート式・６０分・１００点）

大問	小問	細分	正解	配点	大問	小問	細分	正解	配点
Ⅰ	問一	1	④	2点	Ⅱ	問一	17	②	2点
		2	①	2点			18	④	2点
		3	①	2点		問二	19	②	2点
		4	⑤	2点			20	①	2点
		5	②	2点		問三	21	④	5点
	問二	6	②	2点			22	⑥	5点
		7	③	2点		問四	23	①	7点
		8	②	2点		問五	24	⑤	6点
	問三	9	⑤	2点		問六	25	④	6点
		10	①	2点			26	③	6点
		11	②	2点		問七	27	③	7点
		12	④	2点					
	問四	13	④	7点					
	問五	14	①	6点					
	問六	15	③	6点					
	問七	16	⑤	7点					